

三田市モビリティサービス実証推進協議会（兵庫県三田市）

グリーンスローモビリティを利用した 外出促進で住民のヘルスケアを

INTERVIEW



グリーンスローモビリティで住宅街から 中心部へ

兵庫県三田市の北摂三田フラワータウンはまちびらきから40年が経過し、急激に高齢化が進展している。特にまちの外縁部では高齢化率が40%を超える状況にある。フラワータウンの中心部には神戸電鉄フラワータウン駅があり、その周辺に買い物施設や市民センターなど利便施設が集積する。

「中心部は便利なので多くのマンションが建ち、若い住民も多いのですが、外縁部は戸建てが並び、高齢者が多くなっています。地域によっては坂が多いこともあり、免許の返納が進む中、中心部への移動が困難になってきています」（三田市まちの再生部交通まちづくり課 大脇直登氏）。

本実証実験は地域内の外出機会創出を図り、現在移動に不安を抱えている人ばかりでなく、5年後・10年後の移動に不安を抱える人も含め、世代やライフステージに合わせた新しいモ

ビリティサービスを提供することで、持続可能な地域交通の構築による地域活性化を目指すものだ。

そのひとつが、グリーンスローモビリティの運行である。実証実験は地域の中でも高齢化率が比較的高い武庫が丘・狭間が丘の2地区を対象に、11月10日～12月26日の平日に行われ、武庫が丘で231人、狭間が丘で72人が利用した。「住宅街の停留所を回りながら、遊歩道などを使ってゆっくり走ります。両地区で利用者数に差が出ているのは、武庫が丘は1日7便の周回ルートなのに対して、狭間が丘は1日4往復の折り返しルートとなったことで、中心部での滞在可能時間がニーズとマッチしなかったことや、狭間が丘は当初利用登録をしたうえで電話予約しなければなかったことも影響したと考えられます。狭間が丘では、実証期間後半の12月から予約なしで乗れるように変更したところ、利用者が11月の28人から44人に増えました」（大脇氏）。

スマートシューズでグリスロ効果の視覚化も中心部の商業施設と連携してクーポンを発行したり、フレイル予防教室やスマホ教室を開催したりと、外出機会を増やすための取り組みも併せて行った。さらにユニークなのが、スポーツ用品メーカーのアシックスの協力で、Bluetoothに接続するスマートシューズを80人のモニターに利用してもらい、その運動量を可視化する試みだ。

「設置された受信機の近くを通った際にデータを拾っています。受信機は12台と多くはないのですが、大まかな移動は捉えることができます。グリスロが運行を開始する前からデータを取っているのです、導入前後のデータを比較できるのですが、グリスロ運行以降は歩数が増える結果となりました」(大脇氏)。

さらに地域内だけでなく、鉄道や路線バスと連携して行動エリアを広げる試みも行われている。

「外出促進のために『グリスロから降りた先』も検証しようというものです。サブスクリプションで日中の時間帯に、隣接地域のウッディタウンや三田まで鉄道やバスに乗り継いでもらおうという狙いだったのですが、こちらは利用が伸び悩みました。原因については今後分析を行いますが、アプリを使うのでグリスロの主な利用者であった高齢者には馴染みにくかつ

たのかもしれませんが」(大脇氏)。

そして最後の取組が、新たなモビリティの試乗会だ。自動運転型グリスロモビリティや3種類の一人乗り用新モビリティが用意され、体験乗車人数は121人とイベントとしては大盛況だった。

「親子連れの来場者が多く、対象層である将来に移動の不安を抱える方に訴求できたのかは今後の課題です。ただ皆さんの反応はとても好意的で、新しいモビリティサービスへの期待の高さを感じました」(大脇氏)。

今後に向けて、採算性等の課題があるものの、「日常使いのグリスロが地域に根付く事例」(大脇氏)として、本実証に見られるさまざまな取組が外出促進につながれば、医療費削減にも貢献しうることから、本実証で得たデータをベースに、持続可能な地域交通の運行に向けた新たなアプローチの一つとして、行政の負担をクロスセクター的に考えることも視野に入る。

